王陵の地域史研究

～飛鳥地域の後・終末期古墳測量調査報告Ⅵ～

２０１２

例　言

1、この調査は「飛鳥地域の地域史研究」の一環として行った測量調査である。調査地は以下の通りである。

・石舞台古墳　奈良県高市郡明日香村大字島庄小字塚脇135番地他

2、測量調査に際しては、古墳の土地所有者の各位にご理解あるご協力をいただき、順調に進行、完了したことに深謝の意を表したい。また調査・資料収集等に際してご尽力を賜った関係各位に感謝の意を表します。(五十音順・敬称略)

相原嘉之、猪熊兼勝、河上邦彦、辰巳月美、長谷川　透、米田文孝

3、遺跡分布図は、国土地理院発行の二万五千分の一「畝傍」と奈良国立文化財研究所発行の「島庄」(1：1000)「島庄遺跡」(1：500)、明日香村都市計画図（1：2500）を使用した。

4、本書の執筆は西光慎治、辰巳俊輔があたり、文責は各文末に示した。

5、関係書類・図面等は西光慎治が保管している。

6、墳丘測量図の製図は辰巳俊輔がそれ以外を西光慎治が行った。

7、本書の編集は西光慎治が担当し、辰巳俊輔が補佐した。

目　次

例言　目次……(10)

第1章　調査に至る経緯と目的……西光慎治　(11)

第2章　飛鳥地域の測量調査……(12)

第1節　地理的・歴史的環境……西光慎治　(12)

第2節　石舞台古墳測量調査報告……辰巳俊輔・西光慎治　(16)

1、はじめに……(16)

2、測量調査報告……(21)

第3章　総括……西光慎治　(23)

挿図目次

第1図：明日香村周辺地質図

第2図：飛鳥地域周辺遺跡分布図(1：25000)

第3図：石舞台古墳位置図(1：1000)

第4図：石舞台古墳周辺地籍図

第5図：西國三十三所名所圖會

第6図：『大和國古墳墓取調書』

第7図：島荘石舞臺圖・島荘石舞臺内部圖（『大和志料』）

第8図：石舞台古墳墳丘測量図（1：300）

第9図：石舞台古墳石室実測図

第１章　調査に至る経緯と目的

飛鳥地域には多くの後・終末期古墳が分布していることは周知のことである。しかし未だ資料化されていないものも少なくない。こういった中、1982（昭和57）年以降、奈良県橿原考古学研究所や関西大学文学部考古学研究室等によってキトラ古墳をはじめ牽牛子塚古墳や岩屋山古墳、塚本古墳などの測量調査が実施されている。こういった測量調査は基礎資料の資料化として地域史研究にとって重要な役割を担っていることはいうまでもない。

今回の調査は筆者が飛鳥と周辺地域の地域史像の解明に向けて取り組んでいる「飛鳥地域の地域史研究」の一環として企画し、土地所有者のご厚意・ご協力のもと測量調査・踏査を実施したものである。

調査は通常勤務に支障のないことを期したため、休日や年末・年始を利用した断続的な調査となった。調査期間は石室を平成18（2006）年８月に、墳丘を平成23（2011）年５月～平成24（2012）年1月にかけてのべ20日間行った。（西光慎治）

【調査体制】

調査体制は以下の通りである。

	石舞台古墳
担当者	西光慎治
調査員	辰巳俊輔（関西大学文学部考古学研究室）

【見学会の開催】

参加者を中心に測量調査の深化と比較検討を行うため、見学会を実施した。見学した古墳は以下の通りである。

赤坂天王山古墳、岩屋山古墳、打上古墳、カヅマヤマ古墳、カンジョ古墳、艸墓古墳、権現堂古墳、小谷古墳、菖蒲池古墳、新宮山古墳、谷首古墳、谷脇古墳、東明神古墳、塚本古墳、花山西塚古墳、花山東塚古墳、真弓鑵子塚古墳、マルコ山古墳、文殊院西古墳、文殊院東古墳

第２章　飛鳥地域の測量調査

第１節　地理的・歴史的環境

【地理的環境】

明日香村は奈良盆地の南端に位置しており、背後には龍門山地が連なっている。龍門山地は奈良盆地と吉野山地を二分する位置にあり、中央構造線にそって吉野川が西流している。吉野川は下流域の和歌山県に入ると紀ノ川と称されている。龍門山地は奈良県のほぼ中央を東西に伸びており、奈良盆地と吉野山地とを繋ぐ幹線道は現在では芦原峠（芦原トンネル）となっているが古代では下ツ道から続く、巨勢路（紀路）や宮滝へと続く芋ヶ峠がありこれらの幹線道は村内を貫いており交通の要衝であったことが窺える。龍門山地は龍門岳（904m）を主峰にして、北に熊ヶ岳（904m）、経ヶ塚山（889m）、音羽山（801m）が連なり、東には多武峰の御破裂山（619m）を、西に高取山（583m）を配している。明日香村は御破裂山、高取山から派生した樹枝状に伸びた低位丘陵に抱かれた地域に位置している。

明日香村内の主要河川は南東から村内を縦断するように一級河川の飛鳥川が、西には高取川があり、それぞれ北流している。飛鳥川は多武峰と高取山から連なる芋ヶ峠、竜在峠付近に源を発している。途中、冬野川や唯称寺川と合流し、甘樫丘の東方で流れを北西に屈曲させ北流を続けていく。一方、高取川には桧前盆地を流れる桧前川が注ぎ込んでいる。

桧前盆地は標高100mの等高線に囲まれた1km四方の小氾濫原の支谷に形成されており、西側には幹線道の下ツ道が接している。高取川の西方にある貝吹山から伸びる尾根筋の裾部には高市郡と葛城郡との郡界となる曽我川が北流しており、大字寺崎付近で越峠付近から伸びる前川が曽我川に流れ込んでいる。

（西光慎治）

第１図　明日香村周辺地質図

【歴史的環境】

〈縄文時代〉

明日香村では飛鳥川や高取川流域を中心として縄文時代から人類の生活の営みを知ることができる。高取川流域では縄文時代草創期の有茎尖頭器が出土した桧前脇田遺跡をはじめとして、飛鳥川流域では飛鳥池遺跡で草創期の有茎尖頭器と木の葉形尖頭器が出土している。中期～晩期にかけては稲淵ムガンダ遺跡・坂田寺下層遺跡・島庄遺跡・飛鳥京下層遺跡・大官大寺下層遺跡等が存在し、集石遺構や竪穴式住居、土器棺などが検出されている。

〈弥生時代〉

弥生時代になると飛鳥川流域では飛鳥京下層遺跡（岡遺跡）（前期～後期）・山田道遺跡（中期）があり、島庄遺跡では中期の多角形プランを有した竪穴住居が検出されている。冬野川の上流域でV様式系甕が出土したとされており、周辺に集落が存在していた可能性がある。高取川流域では御園アリイ遺跡（中期）で土坑などが検出されている。

〈古墳時代〉

古墳時代ではまとまった遺跡は確認されていないが坂田寺下層遺跡や島庄遺跡、飛鳥京下層遺跡、水落遺跡、大官大寺下層遺跡等で６世紀前半～後半にかけての竪穴住居等が数棟検出されている。また東橘遺跡や川原寺下層遺跡、甘樫丘東麓遺跡、古宮遺跡、上ノ井手遺跡、山田道下層遺跡等でも竪穴住居や韓式系土器、滑石製玉類や土坑等が検出されている。高取川流域では御園アリイ遺跡や桧前タバタ遺跡で竪穴式住居や古式土師器が検出されている。飛鳥川流域では右岸の段丘上を中心に縄文時代から人々が生活を営んできたが、６世紀末に飛鳥真神原に飛鳥寺が建立されて以降、寺院や宮殿が立ち並ぶようになる。飛鳥京周辺でも酒船石遺跡や雷丘、甘樫丘等で形象埴輪や普通円筒が出土しており、宮殿造営に伴って削平、消滅した古墳が多く存在していたことがわかる。更に飛鳥川の支流、冬野川流域には横穴式石室を主体とした約200基を超える細川谷古墳群が展開している。群内には緑泥石片岩の箱式石棺を内蔵した堂ノ前塚古墳や戒成組田古墳、穹窿状横穴式石室を有しミニチュア炊飯具等が出土した上５号墳、石材の一部に切石を用いた打上古墳など特徴のある古墳が多く分布している。また冬野川下流域には一辺約50mの方墳の石舞台古墳が存在し、対岸には都塚古墳や塚本古墳など家形石棺を有した６世紀後半から７世紀初頭にかけての古墳が築かれている。その他、寺川の支流、中の川の上流部には八釣・東山古墳群が展開しており、多くの馬具やガラス玉等が出土している。また曽我川の支流、前川の上流部では６世紀中頃に造営された真弓鑵子塚古墳がある。真弓鑵子塚古墳は玄室の北側に奥室を有し、玄室床面積は石舞台古墳をしのぶ規模であり、石室内からはミニチュア炊飯具をはじめ銀象嵌刀装具、玉類、金銅製馬具、そして獣面を模った獣面飾金具などが出土している。前川の右岸ではミニチュア炊飯具等が出土した与楽古墳群など貝吹山（標高210m）の南側斜面には数百基の古墳が展開し、左岸にあるスズミ１号墳からもミニチュア炊飯具が出土するなど、前川を中心とした周辺の古墳群は東漢氏の奥津城と考えられている。また高取川流域では方格規矩鏡や四獣形鏡等が出土した向山１号墳やミニチュア炊飯具や釵子が出土した坂ノ山古墳群や阿部山遺跡群、銀製釧などが出土した稲村山古墳などが点在している。隣接してある観覚寺遺跡や清水谷遺跡、薩摩遺跡からは大壁建物やオンドル遺構、方形池が検出されるなど檜隈地域周辺には多くの渡来系氏族が蕃居していたことが窺える。

1.岩屋山古墳　2.真弓ワダ古墳　3.小谷古墳　4.益田岩船　5.沼山古墳　6.牽牛子塚古墳　7.越塚御門古墳　8.真弓鑵子塚古墳　9.与楽古墳群
10.スズミ１号墳　11.スズミ２号墳　12.カヅマヤマ古墳　13.マルコ山古墳　14.真弓テラノマエ古墳　15.佐田遺跡群　16.束明神古墳
17.佐田２号墳　18.佐田１号墳　19.出口山古墳　20.森カシタニ遺跡　21.森カシタニ塚古墳　22.向山１号墳　23.薩摩遺跡　24.松山呑谷古墳
25.清水谷遺跡　26.ホラント遺跡　27.阿部山遺跡群　28.稲村山古墳　29.観覚寺遺跡　30.キトラ古墳　31.阿部山廃寺　32.呉原寺跡
33.桧前門田遺跡　34.檜前遺跡群　35.檜隈寺跡　36.坂ノ山古墳群　37.桧前上山遺跡　38.御園チシヤイ遺跡・御園アリイ遺跡　39.塚穴古墳
40.高松塚古墳　41.火振山古墳　42.中尾山古墳　43.平田キタガワ遺跡　44.梅山古墳　45.カナヅカ古墳　46.鬼の俎・雪隠古墳
47.野口王墓古墳　48.川原下ノ茶屋遺跡　49.亀石　50.西橘遺跡　51.定林寺跡　52.菖蒲池古墳　53.五条野宮ヶ原1・2号墳　54.五条野向イ古墳
55.五条野城脇古墳　56.五条野内垣内古墳　57.植山古墳　58.五条野丸山古墳　59.軽寺跡　60.石川精舎　61.橿原遺跡　62.田中廃寺
63.和田廃寺　64.雷丘北方遺跡　65.大官大寺跡　66.カセヤ塚古墳　67.庚申塚古墳　68.山田寺跡　69.上の井手遺跡　70.奥山リウゲ遺跡
71.奥山久米寺跡　72.雷丘東方遺跡　73.雷丘　74.豊浦寺跡　75.石神遺跡　76.飛鳥水落遺跡　77.飛鳥寺跡　78.飛鳥東垣内遺跡　79.竹田遺跡
80.小原宮ノウシロ遺跡　81.八釣・東山古墳群　82.東山マキド遺跡　83.金鳥塚古墳　84.飛鳥池工房遺跡　85.酒船石遺跡　86.飛鳥京跡
87.飛鳥京跡苑池遺構　88.甘樫丘東麓遺跡　89.川原寺裏山遺跡　90.川原寺跡　91.橘寺跡　92.東橘遺跡　93.島庄遺跡　94.石舞台１～４号墳
95.石舞台古墳　96.馬場頭古墳群　97.打上古墳　98.都塚古墳　99.戎成組田古墳　100.坂田寺跡　101.飛鳥稲淵宮殿跡　102.塚本古墳
103.朝風廃寺　104.稲淵ムガンダ遺跡

第２図　飛鳥地域周辺遺跡分布図（1：25000）

〈飛鳥時代〉

７世紀に入ると高取川左岸（真弓丘陵）から右岸（桧前盆地）にかけて多くの終末期古墳が築かれるようになる。真弓から越智丘陵では精美な横穴式石室を有した岩屋山古墳や凝灰岩の巨石を刳り貫いた牽牛子塚古墳や石英閃緑岩の刳り貫き式横口式石槨を有した越塚御門古墳などが存在している。更に南方には多角形を呈したマルコ山古墳や凝灰岩の切石を積み上げた束明神古墳、骨蔵器を内蔵したとされる出口山古墳などが点在している。また結晶片岩の磚積石室で棺台を有したカヅマヤマ古墳や真弓テラノマエ古墳が点在している。桧前盆地になると梅山古墳からカナヅカ古墳、鬼の俎・雪隠古墳、野口王墓古墳が東西に並んで築かれており、南方には八角形墳で火葬墓の中尾山古墳や極彩色の壁画で有名な高松塚古墳が存在している。更に高松塚古墳から1.5km南には四神図や天文図、十二支像が確認されたキトラ古墳がある。飛鳥盆地では蘇我氏の氏寺の飛鳥寺をはじめ、豊浦寺や山田寺、奥山久米寺、坂田寺、定林寺などの多くの古代寺院が築かれる。国家寺院としては百済大寺（吉備池廃寺）が造営され、その法灯は高市大寺、大官大寺、奈良大安寺へと繋がれていく。天皇家の寺院としては斉明天皇の菩提を弔うために川原宮の跡地に川原寺が造営される。また宮殿も乙巳の変の舞台となった飛鳥板蓋宮や斉明天皇の後飛鳥岡本宮、天武天皇の飛鳥浄御原宮や苑池などが造営される。これらの宮殿に近接して酒船石遺跡や飛鳥池遺跡がある。酒船石遺跡では酒船石を中心に丘陵を藤原層群豊田累層の凝灰岩質細粒砂岩を使用した石垣が約700mにわたって巡っており、また丘陵の北側裾部からは亀形石造物を中心とした導水施設と石敷き広場が検出されるなど二槻宮との関連が注目されている。また石上山石を運んだ狂心渠と考えられる幅約10mの運河跡が飛鳥東垣内遺跡で検出されている。この運河の上流に約１kmにわたって続いており、上流部には飛鳥池遺跡が存在する。飛鳥池遺跡は７～８世紀にかけての官営工房で炉跡や石組み溝、掘立柱建物の遺構の他、金属・ガラス玉・鋳型・大量の木簡、また鋳造貨幣では和同開珎より遡るとされる「富本銭」が出土している。この他、飛鳥東方の丘陵地には小原シウロ遺跡や東山マキド遺跡、竹田遺跡があり、７世紀代の掘立柱建物群が検出されている。また橘寺西方にある西橘遺跡では７世紀後半～末にかけての庇付掘立柱建物や大量の木簡が出土している。宮殿域の中心部から離れた桧前盆地では東漢氏の氏寺とされる檜隈寺や呉原寺等の寺院が建立されるようになる。

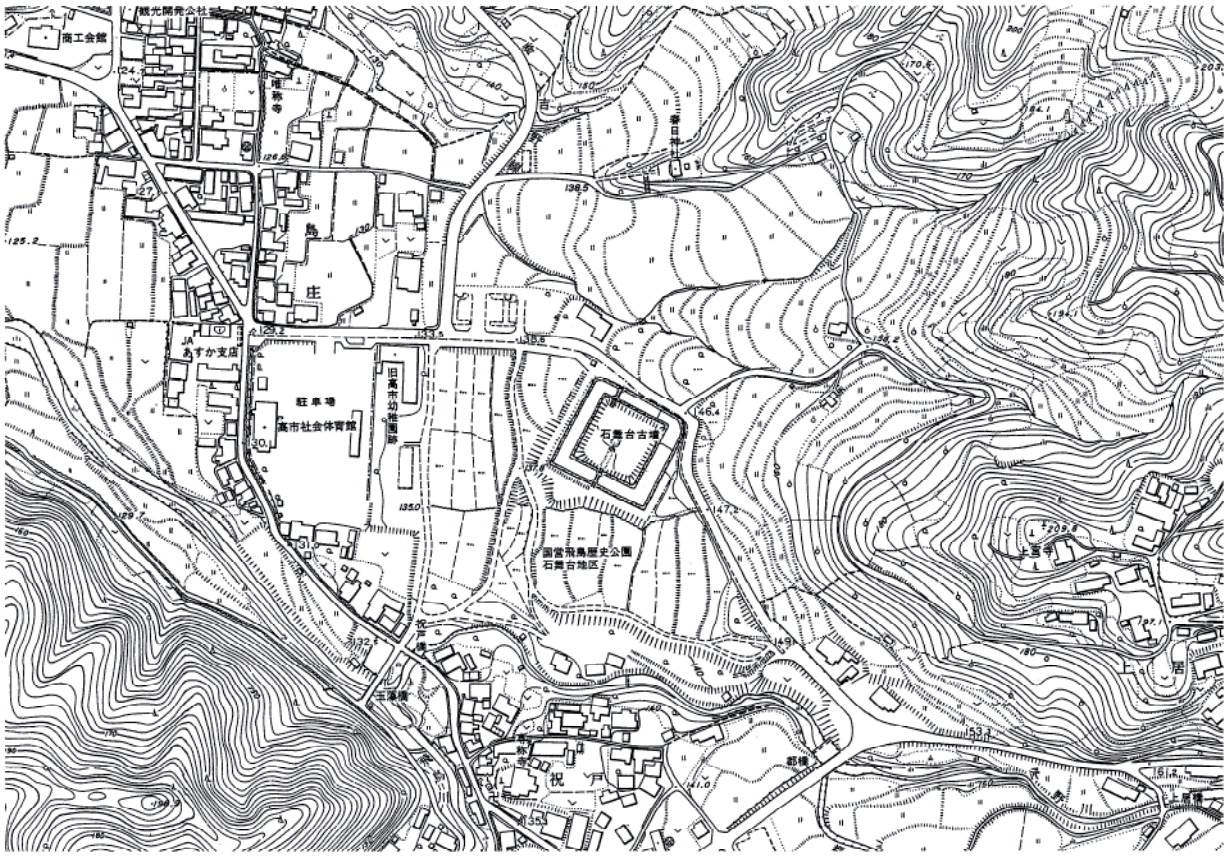
〈奈良時代以降〉

西暦694年、政治の舞台は飛鳥京から藤原京へ、更に藤原京から平城京に移るようになると飛鳥地域では顕著な遺構はあまり認められなくなる。一方、雷丘東方遺跡では井戸枠の年輪年代から淳仁朝の「小治田宮」が奈良から平安時代にかけて存続していたことも明らかとなっている。阿部山遺跡群では11～13世紀代にかけての白磁椀を使用した火葬墓や一辺約４mの墳丘をもつ木棺墓が検出されており、棺内から龍泉窯系青磁椀等が出土している。中世以降になると南北朝期に越智氏が越智城を構え、飛鳥周辺にも貝吹山城や佐田城が築かれるようになる。また越智氏は高取山に逃げ城的な存在の高取城を築き、その後本多氏、植村氏によって改修を重ねながら高取藩の居城として幕末まで存続していく。高取城の石垣の一部には古墳の石材を転用しており、この時期飛鳥地域の後・終末期古墳が破壊されていたことが推測できる。飛鳥盆地には砦的性格をもつ奥山城や飛鳥城、雷城や岡城、そして野口城や貝吹城、観覚寺城が築かれるようになる。近世になると西国七番札所である岡寺（龍蓋寺）の門前町が賑わいをみせ、本居宣長も岡の薬屋で一夜を過ごしており、今日もなお古い町並みは往時を偲ばせてくれる。　（西光慎治）

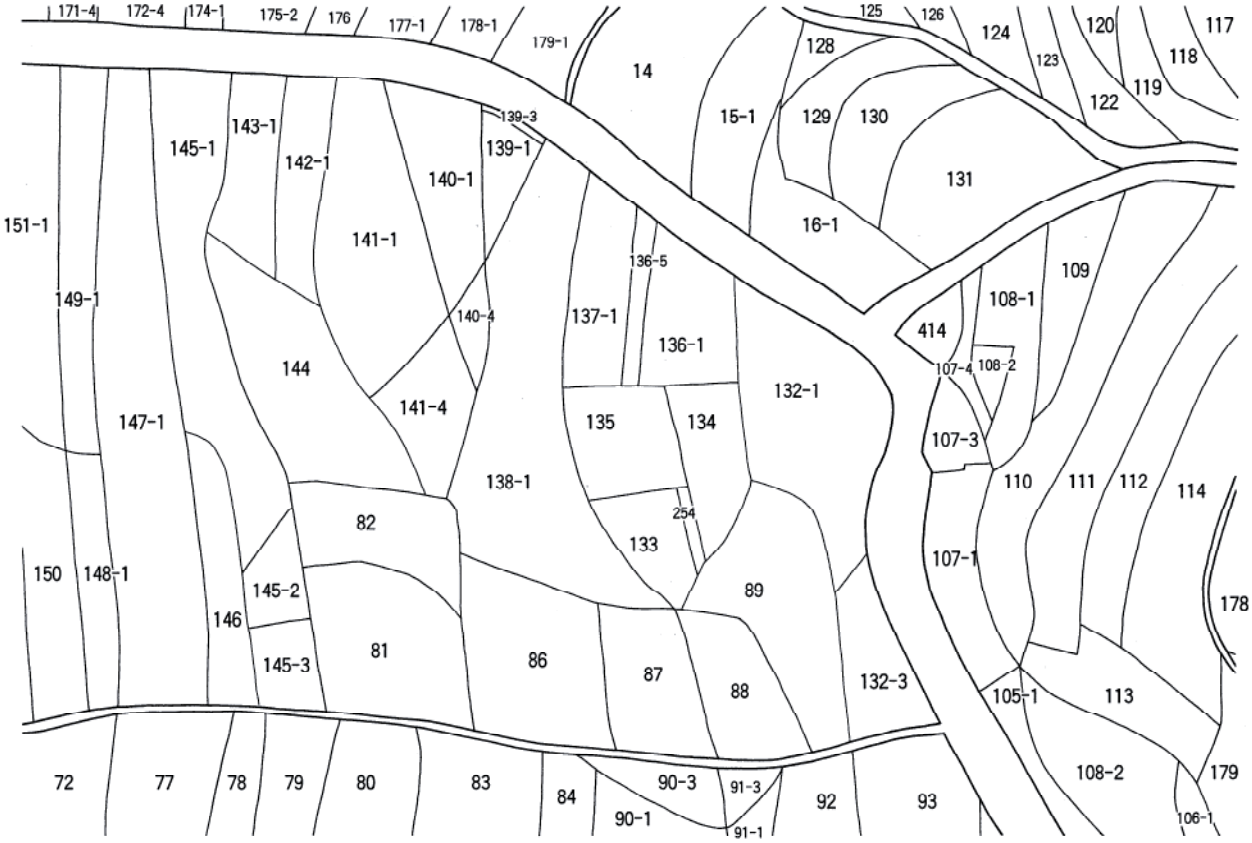
第２節　石舞台古墳測量調査報告

１、はじめに

石舞台古墳は奈良県高市郡明日香村大字島庄小字塚脇135番地他に所在する終末期古墳である。石舞台古墳は飛鳥を代表する古墳の一つで年間を通して多くの観光客が訪れる一大観光地となっている。この石舞台古墳については早くから巨大な天井石が田圃の中から露出しており、人々の注目を集めていたことが残された紀行文等からも窺い知ることができる。1673～81（延寶年間）に著された**『和州舊跡考』**には「細川村より四五町西なり。その近き所に石太屋とて陵あり」と記されている。1751（宝暦元）年には**『古跡略考』**の中で「嶋庄村　石塚　内方二間外東西四間余南北六間余　石太屋といふ陵にや。」とあり当時、石舞台古墳が石太屋（いしぶとや）と呼ばれていたことがわかる。1762（宝暦12）年には士谷川清によって**『書紀通證』**が著され「島の荘村に荒墳あり、疑らくは是れ桃原墓」と記されており早くも島庄の荒墓が蘇我馬子の桃原墓の可能性を指摘している。1772（明和９）年には本居宣長によって**『菅笠日記』**が著わされ、石舞台古墳については「嶋の庄といふ所には。推古天皇の御陵とて。つかのうへに岩屋あり。内は畳八ひらばかりしかるゝ広さに侍り。これも同じ方に。坂田村と申すには。用明天皇ををさめ奉りし所。みやこ塚といひて。これもそのつかのうへに。大きなる岩の角。すこしあらはれて見え侍るなりとなんかたりける。」とあり石舞台古墳は推古陵で都塚古墳が用明陵ではないかと記されている。更に1792（寛政４）年には屋代弘賢の**『道の幸』**の中で「是れより東に入ハ島の庄村。右の畑中に大石をつミたるあり。土人ハいはやといふ。古き墓穴のあはけたるならし」と記されている。1829（文政12）年に津川長道の**『卯花日記』**には「道の辺より少し東へのぼる所畑の中に石窟あり。大なる石を以てくミ立たるものなり。土ハのこりなく落て石ばかりハ残りたるなり。中を見るにすべて物ある事なし。内ハ畳八ひろはかり入ぬべし。いにしへの陵墓土をさりたれは、皆のこるさまなる物なるべし。此墓里人の申伝もなく、大和志にも荒墓と云り。若くハ馬子大臣をおさめたる桃原の墓にてハ不レ有哉、推古天皇三十四年馬子大臣薨仍葬二干桃原一墓と書紀にしるされたり。桃原といふ里今ハなし。」と石舞台古墳の被葬者について蘇我馬子ではないかと検討されている。1848（嘉永元）年には暁鐘成の**『西國三十三所名所圖會』**には「島荘村の道の傍田圃の中にあり。すなわち岡に下る道の左に見ゆるなり。高さおよそ二間ばかり、周およそ十間ばかり。大石を以て積みかさねしものなり。伝へて云ふ、天武天皇を仮りに奉りし古趾なりとぞ。」とあり、天武天皇の殯宮ではないかと記されている。1893（明治26）年に野淵龍潜の**『大和國古墳墓取調書』**には「高市村大字島ノ庄字塚ノ脇ニ在リ　村人ハ本墳ヲ指シテ石ノ舞臺ト呼ブ塚ハ巨石数多ヲ累疊シ内ハ空洞トナリテ田畑ノ間ニ人立セリ是全ク石窟ノ破壊セラレテ玄室ノ露出セシモノナラン四邊皆平坦ニシテ阜丘ノ痕跡モアラズ由是観之其破壊ハ遠ク往昔ニ在リシナラン其形状普通ノモノニアラスト雖ドモ惜ムラクハ口碑傳説其他考証ニ資スベキモノナキヲ以テ考査スルヲ得ス尚他日ノ詳査ヲ要スルモノト考フ」と記されている。1912（明治45）年には喜田貞吉の**「蘇我馬子桃原墓の推定－稀有の大石槨、島の庄の石舞臺の研究」**（『歴史地理』第19巻第４號）で「種々の事情を綜合して、而して之に対して此の墓が斯く日本に一二を争ふ程の巨大なるものなりとの事実は桃原墓と此の石舞臺とを接近せしむるに十分有力なる證據となるべきものなりとす。」と述べられており石舞台古墳が蘇我馬子の桃原墓の可能性について言及している。1915（大正４）年には**『高市郡史料』**が刊行されその中に「石舞臺は高市村大字石舞臺に在りて多武峯街道の西傍にあり。南面にしてもとは一大圓墳なりしものゝ如きも、今は覆土の全部を失ひて石槨の構造中高き部分のみかドルメンとなりて田圃中に露出せり。内部は石材の間隙よ

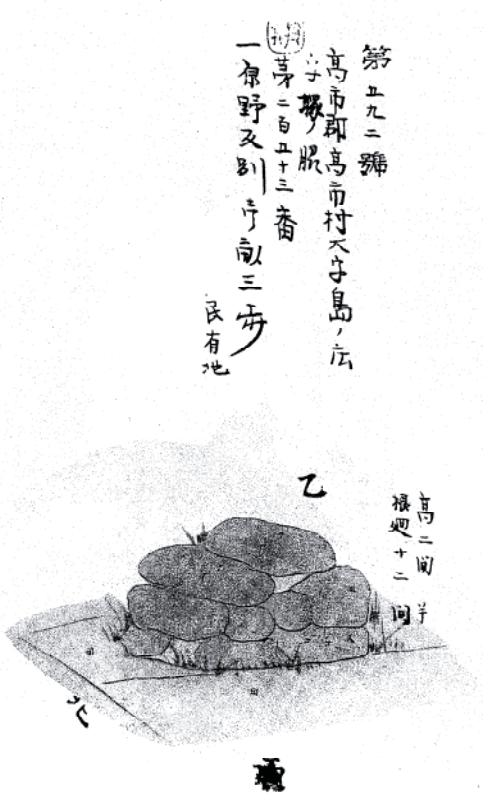


第３図　石舞台古墳　位置図（1：1000）

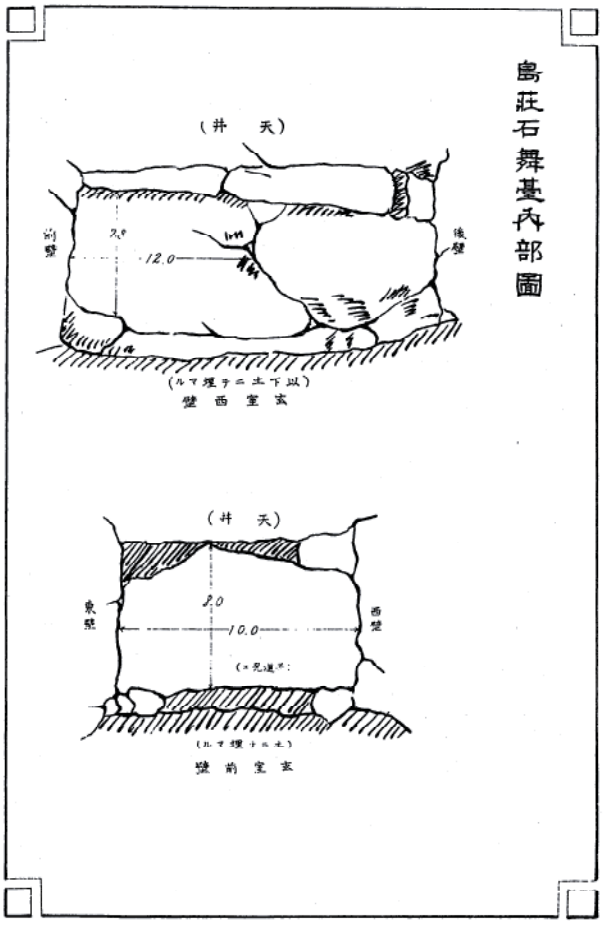


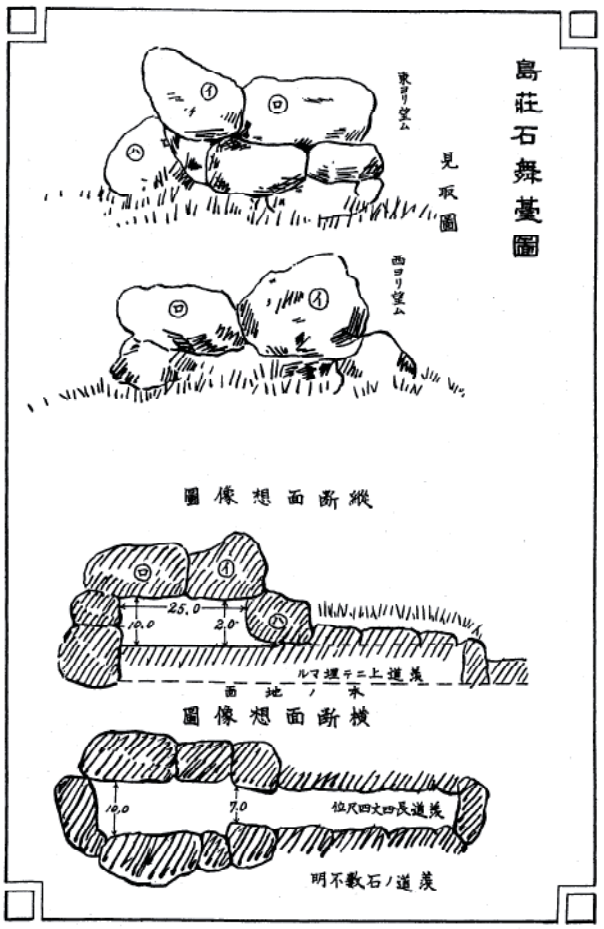
第４図　石舞台古墳　周辺地籍図

第５図　西國三十三所名所圖會

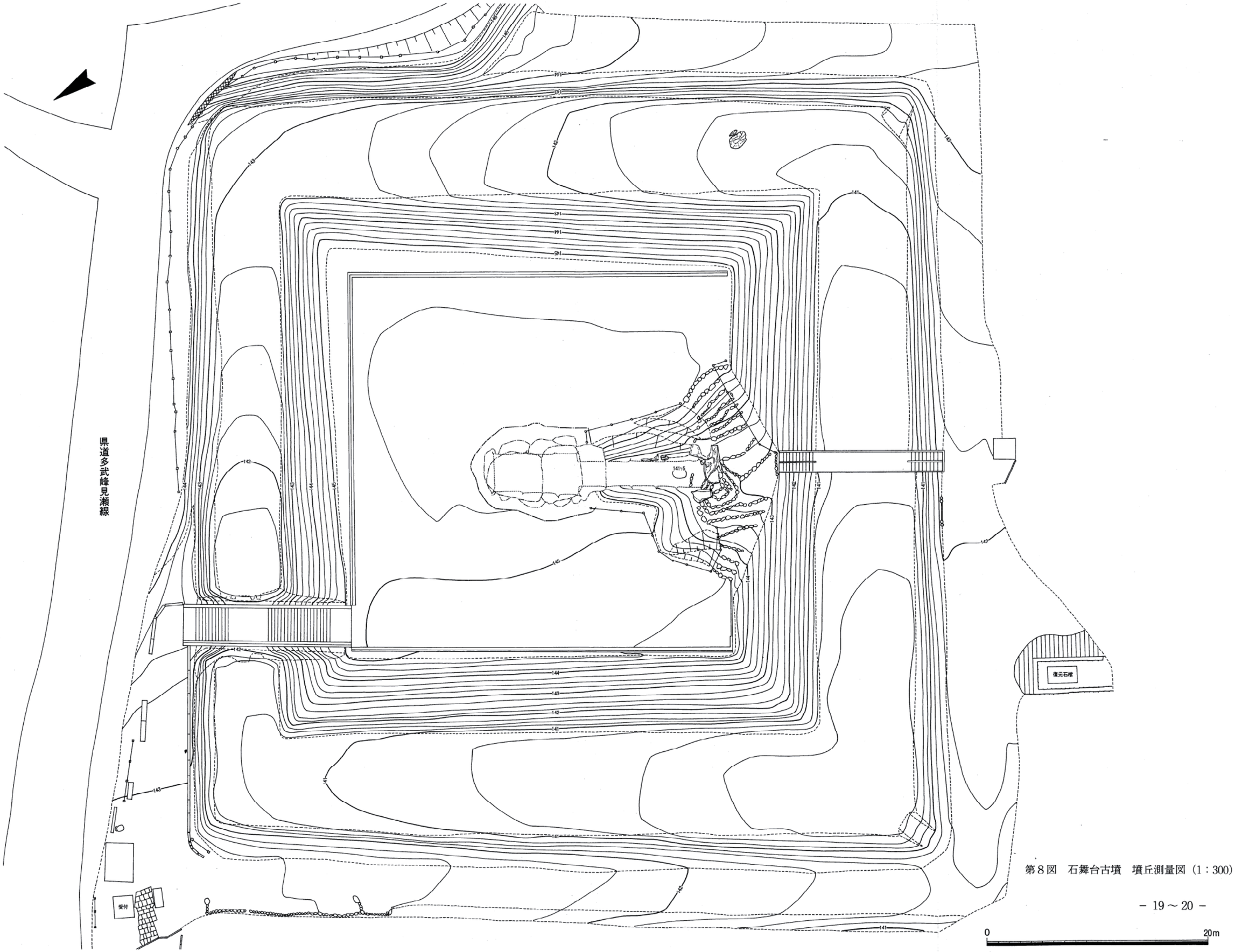


第６図　『大和國古墳墓取調書』





第７図　島荘石舞臺圖・島荘石舞臺内部圖（『大和志料』）



第８図　石舞台古墳　墳丘測量図（1：300）

り流れ込める土砂にて深く埋り羨道の如きも其の入口塞かりて這ひ入ることすら能はす、唯玄室の右壁と後壁との間隙より纔に内部入ることを得るに過ぎす。玄室は長約二丈五尺幅約一丈にして高は現在露出せる部分のみにても約一丈あり。次に羨道の幅約七尺高は玄室に接する部に於て約二尺露出せるか故に之に埋没せる部分を加ふれは更に深さを増すへきなり、長は上部の芝地の長三丈六尺之に玄室前部の石の大さなとを加へて推算するに大約四丈四尺となる、斯くて羨道の入口より玄室の奥壁までの總計約六丈九尺となるなり。石材は花崗岩質片麻岩の久しく渓流の為に侵蝕せられ其の稜角を失へるものにして比較的平滑なる面を内壁に使用せるなり、其の用石の大なる後部天井石の如きは長一丈七尺幅一丈五尺高約九尺に達せるものあり。抑ゝ石槨の大なるものを擧くれは先つ指を白橿村大字五條野字塚の脇なる丸山の石槨に屈せさるへからす。此の塚嘗て天武持統両天皇合葬陵たる檜隈大内陵に擬定せられしことありしか、今は御陵墓傳説地として保管上石槨入口を塞かれたるを以て其の内部を見ること能はす。然るに石舞臺の石槨たる啻に其の規模の壯大なるのみならす、巨石のみを使用して築造せられ且つ覆土の全部を除去せるか為に石材の結構を能く観察するを得るは考古學上最も貴重なる標本の一たるへきなり。」と記されている。1925(大正14)年に刊行された『**奈良縣史蹟勝地調査會報告書**』には「石舞臺(狐舞臺)　周囲田　高市村　大字島庄　字脇ノ脇　253番地　地目原野　面積１畝03歩 廣袤南西四間　南北六間　所有者鳴庄共有」と記されている。昭和８年と10年には京都大学考古学研究室による本格的な調査が実施され、調査の結果、一辺約50mの二段築成の方墳又は上円下方墳で埋葬施設は巨石を用いた南に開口する横穴式石室であることが明らかとなった。石室内外から土師器、須恵器、鉄鏃、金銅製帯金具、金銅製尾錠、金銅製菊座金具、凝灰岩等が出土している。凝灰岩片については玄室東南隅から出土しており、家形石棺の一部と考えられている。昭和12年・昭和34年には保存整備事業の一環として墳丘及び周濠、外堤等の調査と復元整備が行われ、現在に至っている。昭和10年12月24日には国史跡に、同27年３月29日には特別史跡に指定されている。

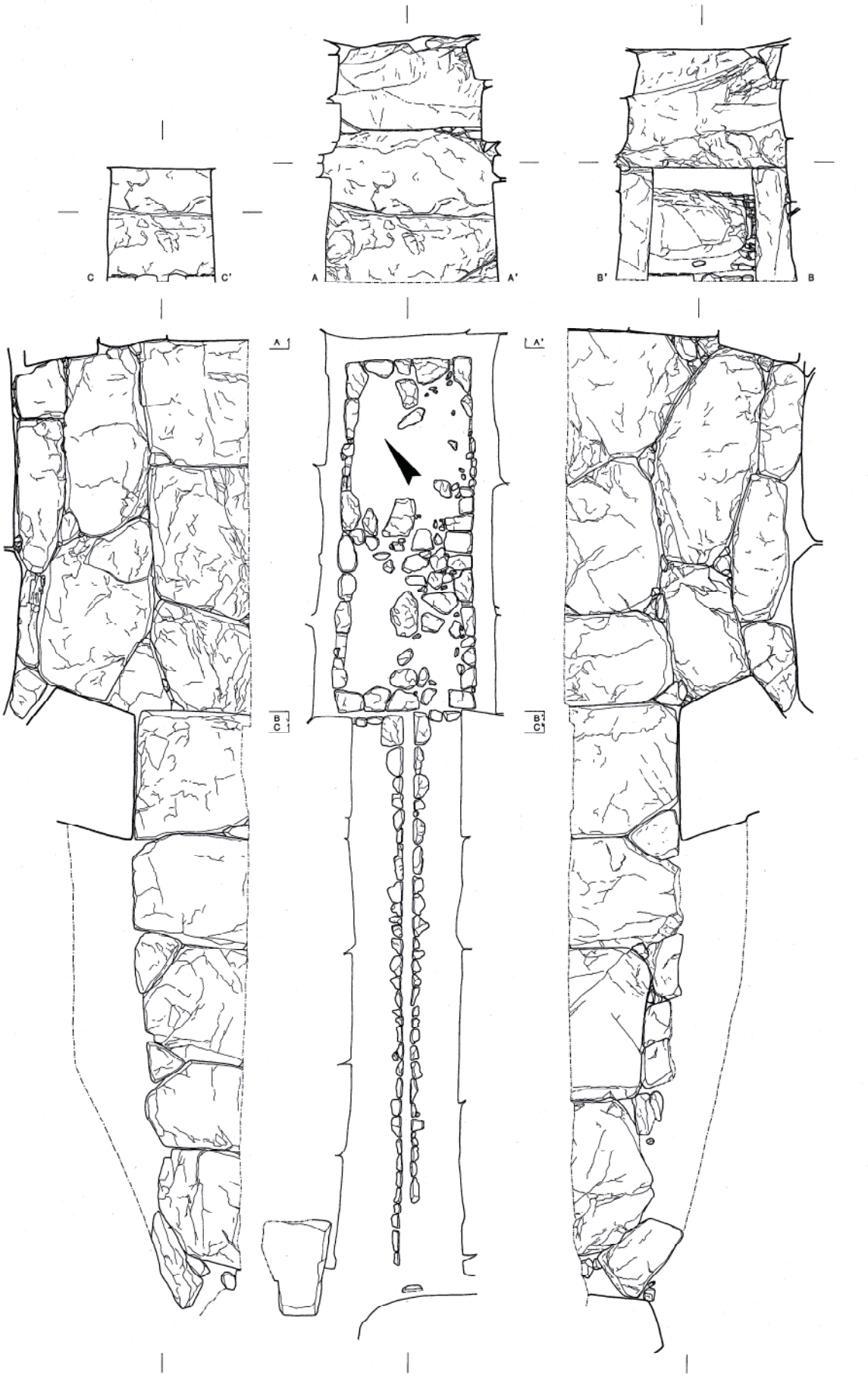
(西光慎治)

２、測量調査報告

【墳　丘】

石舞台古墳は竜門山系から南にのびる尾根の先端に築かれている。墳丘は『西國三十三所名所圖會』に描かれているように江戸時代にはすでに失われており、早くから石室がむき出しの状態であったことがわかる。昭和８・９年の発掘調査により、石室を含む周辺部の調査が行われ、幅約９mの濠と幅約７mの堤が検出されている。現在の墳丘はその年の発掘調査により方墳であることが確認され、その後の環境整備事業によって標高144.250mより、上部に盛土が行われている。墳丘は下段基底部付近以外、築造当時の姿をとどめておらず、高さについては北隅の墳丘裾の標高143.000mから現墳頂の標高145.250mまで2.250m、南隅の墳丘裾の標高140.500mから現墳頂の標高144.500mまで４mを測り、南側が1.750m低くなっている。南が低くなった要因は、墳丘が東から西へ伸びる尾根を利用して築かれているためと考えられる。墳丘規模については、今回の測量調査の結果、現況で一辺49.5mであることを確認している。上段については前述したように早くから盛土が失われているため定かではないが、石舞台古墳が造営された時期に大型方墳が多く築かれたことなどを考慮すると、上段も方形を呈していた可能性が考えられる。ただ、発掘調査の際に検出された石材の配置から上段を円形とする見解もだされており、上円下方墳との見方もある。いずれにしても石舞台古墳の墳丘下段部は飛鳥地域でも最大級の方形を呈していたことはまちがいない。

(辰巳俊輔)



第９図　石舞台古墳石室実測図

【石　室】

石室は細川谷流域から採石した角閃石黒雲母石英閃緑岩を使用した南西に開口する両袖式の横穴式石室である。石室規模は全長約19m、玄室長は左右各側壁で7.75m、主軸で7.7mを測る。幅は奥壁3.5m、中央3.44m、袖部3.7mである。高さは4.8mを測る。羨道は右側石19.15m、左側壁19m、主軸で19.6m（転落した天井石まで）となる。幅は玄門部が2.22m、中央部2.1m、羨門部が2.57mである。高さについては玄門部で2.25mを測る。

玄室の壁面は奥壁が二段積みで左右各側壁は三段積みとなっている。石材は左側壁が８石、右側壁が10石、奥壁が２石から構成されており、隙間にも石材が充填されている。天井石は巨石２石で構成されている。玄室床面には四方を人頭大の川原石で囲み内側にも石材を充填した石床状を呈しており、規模は長さ7.6m、幅奥壁側2.5m、中央2.7m、玄門側2.78mを測る。周囲には排水溝が設けられており左右の溝幅約30cm、深さ20cm、奥幅約45cm、深さ各20cmとなる。玄室内の水の流れは右側壁から奥壁、左側壁裾から玄門部に至り、更に羨道中央に設けられた幅約60cm、深さ約20cmの排水溝へ流れる仕組みとなっている。また石床状の下が暗渠となっており羨道の排水溝へと繋がっている。羨道の側壁は一段一石積みで左右各４～５石で構成されており、天井石との隙間には逆三角形を呈した石材を充填したいわゆる矢筈積み技法を用いている。天井石は前壁以外すべて失われている。この前壁は玄室側に斜めに架構されており、前壁の高さは約２mを測る。羨道中央には玄室から伸びる幅60cm、深さ40cmの排水溝（開渠）が存在する。羨門部には天井石が落ち込んで入口を塞いでいる。

（西光慎治）

第３章　総括

今回、石舞台古墳の墳丘部の測量調査を実施することができた。石室については2006年８月に実測調査を実施しており、これで石舞台古墳の墳丘と石室の測量図が揃ったことになる。石舞台古墳は一年間を通じて多くの観光客が訪れる飛鳥を代表する観光地となっていることから、測量調査にあたっては観光客が少ない時期に行うこととなり、断続的な調査となった。今回の測量調査では墳丘及び外堤部の測量も実施しており、墳丘部については東西南北各辺が49.5mであったことが確認された。この規模については昭和８年の発掘調査後、昭和33年の環境整備事業により墳丘部の復元が行われている。今回明らかとなった墳丘規模も発掘成果に基づいた復元であることから一辺49.5m（約50m）という数値は尊重しておきたい[1)]。このように、石舞台古墳の測量調査は飛鳥時代の大型方墳を考える上で重要な位置をしめるものと考えられる。今後、石舞台古墳の周辺部において開発等も予想されることから、現況を把握し資料化しておくことで今後、飛鳥地域の後・終末期古墳の研究や保存対策等を検討する上でたたき台になれば幸いである。

（西光慎治）

【註】

1）石舞台古墳の規模については下方部一辺は上辺約44m、下端約50m、濠の幅は南側13.1m、北側9.11m、東側12.45m、西側は11.9mと報告されている（網干1961）。

【引用・参考文献】

京都帝國大學1937 『大和島庄石舞臺の巨石古墳』京都帝國大學文學部考古學研究報告第14冊

奈良県教育委員会1961 「特別史跡石舞台古墳復元にともなう調査概報」『奈良県史跡名勝天然記念物調査抄報第十四輯』

網干善教1978 「石舞台古墳」『飛鳥の遺蹟』駸々堂出版株式会社

西光慎治2007 「石舞台古墳測量調査報告」『明日香村文化財調査研究紀要』第６号　明日香村教育委員会

報 告 書 抄 録

ふりがな	おうりょうのちいきしけんきゅう
書名	王陵の地域史研究
副書名	飛鳥地域の後・終末期古墳測量調査報告Ⅵ
巻次	
シリーズ名	
シリーズ番号	
編者名	西光慎治編
著者名	西光慎治、辰巳俊輔
編集機関	明日香村教育委員会事務局文化財課
所在地	〒634-0141　奈良県高市郡明日香村大字川原91－3　TEL 0744-54-5600　FAX 0744-54-5602
発行年月日	西暦2012(平成24)年3月26日

所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査原因
		市町村	遺跡番号				
石舞台古墳	奈良県高市郡明日香村大字島庄小字塚脇135他	29402-1	17-B-12	34° 28′ 00″	135° 49′ 33″	1次 200608 2次 201105 ～201201	学術

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
石舞台古墳	古墳	飛鳥時代	横穴式石室	－	一辺約50mの方墳